平成27年度和歌山県名匠

橋　爪　靖　雄（はしづめ　やすお）

◎　業績及び経歴

昭和10年に海南市で生まれた氏は、同じ漆芸家であった父、義雄氏の影響を受け、23歳の時に自分も漆芸家の道を歩むことを決意、上京して漆芸家・佐治賢使氏のもとで下地から蒔絵（まきえ）、螺鈿（らでん）、平脱（へいだつ）・平文（ひょうもん）などの伝統的な手法を学んだ。

昭和37年に帰郷し、漆工芸制作に入る。同年第５回日展に初入選し、以降入選を重ね、昭和40年には郷土漆工芸の発展を目指し、若手漆芸家による「グループ漆」の創設に貢献した。

氏の作品は、会得した伝統の技法を駆使し、洋画風の図柄を取り入れるなど、伝統を踏まえた上で進取を備えた漆工芸品として全国的にも評価が高く、昭和59年の第16回日展において工芸部門では県下初の特選を受賞。また、本県の文化振興に対する功績から、昭和54年度に和歌山県文化奨励賞、平成12年度には文化功労賞を受賞した。

「先人の誇る技術を一人でも多くの人に知ってもらいたい」と伝統の技と常に向き合い、数多くの傑作を生み出してきた。

代表作には、成田市・八富成田斎場エントランスホール、海南市保健福祉センターふれあいホール、アバローム紀の国エントランスホールなどの漆壁画がある。近年も、海南市浄國寺に「四季の草花と星座」をテーマにした蒔絵天井画を完成させるなど、創作活動はおとろえをみせることなく、真摯に制作に取り組む姿勢は、その作品にも表れており、長年にわたり、漆工芸の振興普及に尽力した功績は誠に多大である。

職　　種：漆芸家

住　　所：和歌山県海南市

生　　年：昭和10年